

商務印書館関係資料いくつか

沢本 郁馬

1 『日本人之支那問題』について

拙稿「商務印書館と金港堂の合併解約書」(『清末小説』第27号2004.12.1)において、商務印書館と中華書局の関係が紛糾する原因となった『日本人之支那問題』に触れた。

もとは、日本の雑誌『実業之日本』第22巻第13号(1919.6.15)の特集「支那問題号」である。該誌から論文13本を選択し漢訳のうえ出版したのだった。

論文執筆時には、該書を見ることができなかった。

本稿においてももう少し詳しく紹介する。

表紙は、「日本実業之日本社著 / 日本人之支那問題 / 上海中華書局訳行」と文字だけで構成されている。

奥付は「民国八年七月発行 / 訳者 中華書局編輯所 / 発行者 中華書局」となっている。

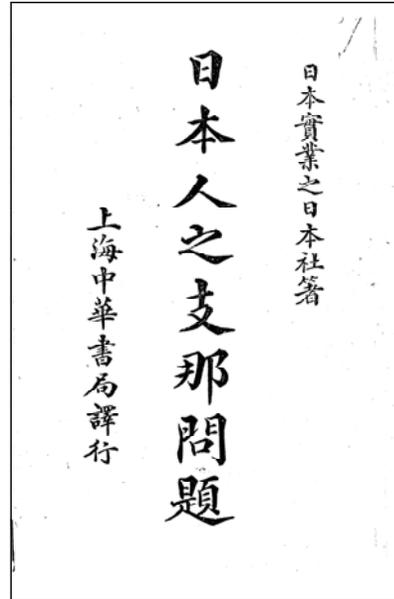
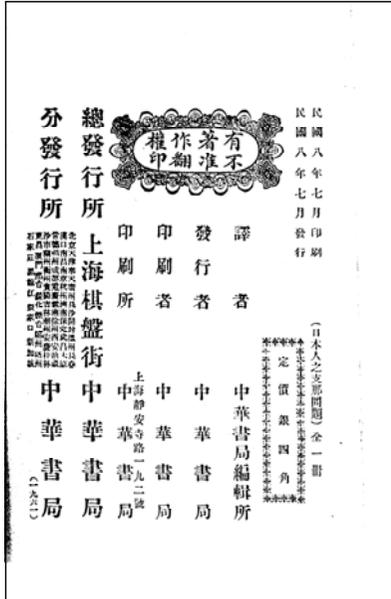
目次は、甲76頁、乙68頁、丙52頁の合計196頁だ。

奇妙なのは、原本『実業之日本』で各論に掲げられたそれぞれの著者名は、漢訳ではすべて削除されている点である。中国では、個々の日本人の名前などどうでもよく、単に「日本人」で十分だという認識なのかと思われる。

漢訳題名とページ数、それに対応するもとの日本題名および著者名を掲げておく。

対華外交之一転機 甲1

対支外交之一転機(署名不記)



- 中国外交之特質批評 甲19
 支那外交の特質批判.....青柳篤恒
- 排日之解剖 甲33
 排日の解剖.....倉知鉄吉
- 就中国对外敵愾心忠告中国之有識者 甲39
 支那の對外敵愾心に就て支那の有識者に忠告す.....高橋作衛
- 日本对华外交方針 乙1
 日本の対支外交方針.....小村欣一
- 中国之国民性及国民思想 乙17
 支那の国民性及び国民思想.....服部宇之吉
- 中日合辦事業与其經營者 乙29
 日支合辦事業と其經營者.....中華道人
- 中国为天与之原料国 乙49
 天との原料国支那.....吉田虎雄
- 山東問題与中日両国之教訓 丙1
 山東問題と日支両国の教訓.....中野正剛
- 中日經濟同盟論 丙11
 日支經濟同盟論.....藤山雷太
- 中日諒解論 丙21

調度約亦有二十萬兩原料之小麥從無錫營州鎮江蕪湖漢口及大連購入一
日生產約一千袋營業成績甚佳

十 商務印書館

商務印書館最初為中國人所營之事業開業後二年全部撥於大前此建設新
工場所預之巨價遂不能償還恐多方苦難乃商之金港堂原亮三郎改為中日
合辦之事業時為明治三十六年十二月當時力謀萬難利用我資本金六十萬
元因得復業漸挽頹運而有今日之盛大中國人方面多恐實權歸於日人又欲
避股東之內訌及官廳之責備遂根據日本登記手續過於煩瑣之理由乃於香
港登記又恐生中國人之誤解乃於中國農工商部註冊為中國公司以圖業務
之擴張是時適為新舊兩學之過渡時代新學書籍刊行既多則事業益臻繁盛
現今資本金百萬元成績甚佳年年有一分內外之利益

中日合辦事業與其經營者

乙三九

日本人之支那問題

乙四〇

圖同滿而業務愈形發達但中國人之心理以為該書館表面雖為中國公司然
實權仍歸日人終不能掃除之勢前年北京開教育會時會長張元濟氏為該
書館中國人方面之代表者而教育會員之一部及外部之一般人等多誤會張
氏為該書館中日本人之僱用彼之所以為教育會長者以該書館之出版物
多能供給中國諸學校中國教育權之基礎全然操於日本人之手當時此相
見者亦有其人蓋此種輿論不獨該書館方面有之其他中日合同之事業亦
往往聞之是我當業者所受影響不少也

十一 上海絹絲製造股份公司

本公司以屑物為原料依化學及機械之作用以為絹絲紡績設立於明治三十
九年五月資本金四十萬元中日各半日本方面之出資者初為絹絲紡績公
司後以該公司歸為絹湖紡績公司故現日本方面之代表者轉為絹紡其事業
成績甚佳由日本經營之其原料由無錫常熟杭州等處購入屑物成為製品供

日支諒解論.....増田義一

歡迎留學生為親善之根本 丙33

留學生を迎ふるは親善の根本.....高田早苗

新中国之将来 丙36

新らしき支那の将来.....稲葉君山

このなかに「中日合辦事業與其經營者」がある。そこに商務印書館が出ているものだから、商務印書館側の反発を招いた。日本企業との合併はすでに解消しているにもかかわらず、いまだに合併企業のひとつにあげている、このままだと誤解を生む、というのが理由だ。しかも、中華書局は、単行本が出版される前に、日中合併部分だけを別に印刷してピラを作成し各界にばらまいた。中華書局の商務印書館に対するいやがらせである。だからこそ、商務印書館は、証拠としていわゆる「合併解約書」を新聞で公表した、といういきさつだった。

商務印書館と中華書局が『申報』紙上でくりひろげた広告合戦のなかで、あきらかにされたひとつの事実がある。

すなわち、そのピラを見た商務印書館が、中華書局にむけて訂正を要求する手紙を送っているということだ。中華書局は、つぎのように書いている。「商務印書館

が手紙でよこした「実業之日本が誤って商務印書館を日中合弁会社と掲載したことにたいして訂正を要求する」という文面は、将来、該書の巻頭に補うことにする」（『申報』1919.7.23）

『日本人之支那問題』の冒頭には、上の広告通りに商務印書館の手紙が掲載されている。中華書局の返書もあるから下に原文を示す。

商務印書館来函

中華書局台鑒敬啓者讀今日各報告白得悉前聞有人將実業之日本誤載敝館為中日合股公司之撰述誤成華文發行者即為 貴局敝館与 貴局既属同業彼此情形俱所熟悉敝館往年收回日股一事疊經登報布告尤為

貴局諸君所深知且実業之日本社亦已函復敝館允為更正今

貴局既將該段文字誤印敝館亦為同様之請求謹將敝館收回日股契約送呈 警閱務祈

貴局即予更正於所印該書每冊内在該段之後用大字登載并祈

先將印成之書一分及更正之稿擲下一閱再

貴局告白有由郵政暨轉運分達各省之語未知已寄出若干分寄至何處并乞

見示不勝感禱之至端此敬頌

公祺

商務印書館謹啓七月二十日

復商務印書館函

商務印書館台鑒敬啓者奉

惠書謂「実業之日本載敝館為中日合股公司 貴局既將該段文字誤印敝館亦為同様之請求務祈為更正」云云查敝局誤印日本人之支那問題一書係為資国民對日之研究其中日合股事業篇第十款叙述

貴館合股情形敝局係照原文翻訳

貴館告白所謂借此誣陷云云未知何指應請登報声明至

雅意諄囑更正一節自當將來函補刊卷首以全同業之誼一俟印就即以一份呈

覽專此佈復即頌

台安

中華書局謹啓七月廿二日

商務印書館は、中華書局にあてた手紙において、『実業之日本』が「誤載」して

いと書く。すでに合併を解消しているにもかかわらず、あたかも現在も合併が続いているように該文は説明している。商務印書館側にしてみれば、これは明らかに「誤載」である。

だが、中華書局側から見ればどうか。返信に見える商務印書館の手紙からの引用に注目してほしい。商務印書館が「実業之日本誤載」とあくまで「誤載」と書いているにもかかわらず、中華書局は、わざわざ「実業之日本載」と書いてもとの手紙の「誤」を無視する。中華書局側にすれば、商務印書館は日本企業と現在は合併企業ではないかもしれないが、問題はそこにはなく、過去においてそうだったという事実を重視しているのだ、ということだ。

中華書局のこういうかたくなな態度が、商務印書館をして裁判に訴えさせることになるのだ。

2 『中国出版史料・近代部分』の商務印書館関係

宋原放主編、汪家熔輯注『中国出版史料・近代部分』全3巻（武漢・湖北教育出版社2004.10）が出版された。

1815年から五四運動前までの出版史料である。

第1巻は、官立、キリスト教会などの出版機構、あるいは関係文書を収録する。第2巻は、翻訳、雑誌新聞、教科書などの重要出版物を集める。第3巻は、民営の出版活動と印刷、発行材料を採取する。張静廬輯註『中国出版史料』所収の資料と重複しないのが編集方針だという。

商務印書館関係で気のついたことだけをのべる。

第2巻の『最新国文教科書』について

「編輯大意」を掲げているが、537頁に文章の欠落がある。

この欠落は、張人鳳「商務印書館的《最新初等小学国文教科書》」（『清末小説』第20号1997.12.1）に見られる。その欠落をおぎなったのは、樽本照雄「初期商務印書館における教科書の系譜 『最新国文教科書』第1冊まで」（『大阪経大論集』第53巻第4号（通巻第270号）2002.11.15）なのだ。該当部分は、樽本照雄『初期商務印書館研究（増補版）』（清末小説研究会2004.5.1）の251頁にも収録してある。

『中国出版史料・近代部分』の該文に欠落があるということは、原文から採録し

ていないことだろうか。張人鳳の文章から孫引きして知らぬ顔をしているように見える。

第3巻の「商務印書館清退日股合同」について

この契約書は、沢本郁馬のいわゆる「合弁解約書」そのものである。沢本の発見とは関係なく中国でも同一文書を見つけていたらしい。

いくつかの誤植がある。そのうち重要であると思うものを指摘する（清末小説研究会のウェブサイトに掲げた）。

1 奇妙なことだが、史料は『申報』の掲載月日を「1919年7月24日」と誤っている。41、42（注1）頁

正しくは、7月25日だ。なぜ、このような間違いが生じたのか理由はわからない。

2 最後の署名部分に誤りがある。

誤「見証 三本条太郎」 正「見議 三木甚市」（41頁）

山本条太郎から連想して誤記したのかもしれない。

3 『涵芬楼新書分類目録』に関連して

商務印書館編訳所は、仕事上の必要から書籍を収集していた。その蔵書をまとめて涵芬楼と称し、これがのちの東方図書館である*1。

本稿で問題にする『涵芬楼新書分類目録』あるいは『涵芬楼新書分類総目』という目録は、商務印書館編訳所が所蔵する書籍について記した自社出版物ということになる。

私がこの書目の存在を知ったのは、はるか昔のことだ。阿英『晚清小説史』（上海・商務印書館1937.5）の「第1章晚清小説的繁栄」に出てくる。彼は、清末小説の発行が繁栄していることを説明するためにいくつかの書目を例に引き、それらに収録された小説の数を問題にする。

該当部分を引用する。

書目で最も多くを収録しているのは、『涵芬楼新書分類目録』をあげなくてはならない。文学類では全部で翻訳小説を400種近くと創作を約120種を収録している。出版時期でもっとも遅いのは宣統三年（1911）である（書目上収的

多的，要算涵芬楼新書分類目錄，文学類一共收翻譯小説近四百種，創作約一百二十種，出版期最遲是宣統三年（一九一一年）1頁

『涵芬楼新書分類目錄』には、創作120種と翻訳400種近くが収録されているらしい。合計520種として計算すれば、翻訳が全体の約77%を占めることになる。これが、清末小説は「翻訳が創作よりも多い」という阿英の主張の根拠のひとつとなったと考えられる。また、1911年発行の小説を収録しているというのだから、該目錄の出版は、1912年ころだとの推測が成り立つ。

阿英の同書「第14章翻譯小説」では、『涵芬楼新書分類總目』（278頁）という名称で登場する。「目錄」が「總目」となっており、まぎらわしい。同じ書目であろうと推測されるが、異なった書名は、のちの改訂版2種でも訂正されていない。改訂を行なった阿英自身も気付かなかったのか、校勘をした呉泰昌の手元には該目錄がなかったのか、そのわけはわからない。

著者の阿英が注意していないから、同文を再録するばあいも、そのままにされる。

上の第1章と第14章は、「晚清小説的繁栄」という題名でまとめられ、張静廬輯註『中国近代出版史料初編』（上海・上雑出版社1953.10. 184-203頁）に収録されている。『涵芬楼新書分類目錄』『涵芬楼新書分類總目』と表記され原文のとおりである。訂正も注釈もない。

中島利郎訳注「阿英『晚清小説史』試訳ノオト（1）」（『呷唾』5号1975.12.31）には、つぎのような注釈がほどこされている。該目錄に言及して珍しい部類に属する。

註 涵芬楼新書分類目錄 未見。涵芬楼とは上海商務印書館の蔵書閣名であり、その蔵書閣所蔵の新学書分類目錄を指すものと思われる。涵芬楼の蔵書目錄としては、ほかに『涵芬楼蔵書目』および『涵芬楼蔵書目錄再続編』などがある。尚、十四章では「分類總目」となっているが、いまいずれが正しいか詳らかでない。43頁

書名に違いがあることに注目している。そのほかの蔵書目錄を列挙しているのが新しい。あげた『涵芬楼蔵書目』は、いかにもありそうな書名だ。だが、『涵芬楼蔵書目錄再続編』とはなにか。「再続編」という箇所に違和感を覚える*2。その書き方を見れば、くりかえすまでもなく『涵芬楼新書分類目錄』のほかに2種類の蔵

書目録が出ていることになる。中島がわざわざ書いているのだから、これらの書目が存在していることについて何か根拠があるのだらうとは思ふ。残念ながら、かかげた目録間の関係がもうひとつはっきりしない。原物で確認をしていないから無理もない。

中島の注釈は、つぎにあげる翻訳にほぼ全文が採用されている。

阿英著 飯塚朗、中野美代子訳『晚清小説史』(日本・平凡社 東洋文庫349 1979. 2.23)に見える2カ所の注だ。

(1)『涵芬楼新書分類目録』涵芬楼とは上海の著名な出版社である商務印書館の蔵書閣名であるが、その蔵書目録としては、宣統三年(一九一一年)刊の『涵芬楼蔵書目録』(あるいは『涵芬楼蔵書書目録』か)及び民国八年(一九一九)刊『涵芬楼蔵書目録再続編』がある。他に『涵芬楼中外新書目録』(刊行年不明)あり、ここに謂う『新書分類目録』とは、『中外新書目録』を指すのであろう。290頁

こちらの注で新しいのは、『涵芬楼蔵書目録』(または『涵芬楼蔵書書目録』)、『涵芬楼蔵書目録再続編』、『涵芬楼中外新書目録』と3種類も登場させているところだ。中島のもとの注と微妙に異なった書目の名称なのだ。

3種の目録をあげたうえで、その中の『涵芬楼中外新書目録』が正しいのではないかと推測している。阿英が示した『涵芬楼新書分類目録』は間違いである、そういう目録は存在していない、といているのとはかわらない。

阿英の勘違いは、別の場所でもいくつかある。しかし、第14章でよく似た『涵芬楼新書分類総目』を挙げているのだから、まったく別物であるらしい『涵芬楼中外新書目録』を持ち出したのは、かなり大胆であるといわねばならない。

(14)『涵芬楼新書分類総目』第一章注1参照。第一章では『涵芬楼新書分類目録』となっているが、未見のためこのままにしておく。370頁

こちらの注には、第1章の注で掲げた『涵芬楼中外新書目録』には言及していない。それとの関係はどうなるのか。記述をしないから無視をするつもりらしい。中島試訳ノオトの注釈は、それで一貫していた。しかし、翻訳『晚清小説史』の注で

は、別の見解をつけ加えた、あるいは、考えを変更したらしいから記述にソゴが生じた。

どのみち、未見の書目について、別のこれまた見ていない書目との関係をうんぬんしたところで、説得力が増すわけではない。

のちに発行された『商務印書館図書目録(1897-1949)』(北京・商務印書館1981)には、自社の発行物であるにもかかわらず、『涵芬楼新書分類目録』あるいは『涵芬楼新書分類総目』の記載がない。市販された目録ではないということなのだろうか。

考えてみれば、阿英以外に言及した例を知らない(私が知らないだけで、専門家のあいだでは有名なのかもしれない。ご教示をいただけるとうれしい)。阿英の文章を引用して示すものは、ある*3。引用しているだけだから、目録の原物を見ているとは限らない。

『涵芬楼新書分類目録』あるいは『涵芬楼新書分類総目』は、どうやら阿英を除いて、ほとんどの研究者が手に取ったことのない目録だとわかる。それほど珍しいものらしい。蔵書目録だから、研究者の目に触れないということはないはずだが、奇妙なことだ。もっとも、商務印書館が内部の参考用に編集したものだとしたら、広く出回っていない理由になるかもしれない。

私が入手したのは、涵芬楼蔵書目録の複写である。表紙も扉も奥付もない。もともとないのか、それとも複写のためなのか、わからない。

とりあえず内容を説明しよう。

いきなり「借閲図書規則」がある。

本館図書は、現在のところ編訳所同人が編訳するときの参考に供するだけだ、と宣言する。

ということは、この蔵書目録は内部参考用のみの出版物のように受け取れる。それにしては、活版印刷でしっかりと製本されている(ように見える)。内部参考用であれば、奥付がないのも理解できないこともない。

興味を引くのは、図書を次の8門に分類していることだ。

天字 旧書

地字 教科書及教科参考書

元字 東文書

見える。

目次および本文の柱には「涵芬楼蔵書目録」と記す。

もうひとつ目を引くのが、この蔵書目録には、「続編」がついていることだ。つまり、増補している。そのなかのひとつに呉曾祺『涵芬楼文談』商務印書館印本がある。これは、宣統三（1911）年の発行だという。となれば、該目録は、1911年あるいは1912年頃の発行と推測できる。

以上から次のことが考えられる。

商務印書館の涵芬楼に所蔵される図書について、『涵芬楼蔵書目録』が編集発行された。

この『涵芬楼蔵書目録』には、2種類があると推測される。

ひとつは、旧書を収録した「涵芬楼旧書分類総目」である。これには「続編」がついている（確認済み）。

もうひとつは、新書を収録する「涵芬楼新書分類総目」である（推測）。今、手元にある「旧書分類総目」の名称と合わせるには「新書分類総目」とした方がおさまりがよい。

「涵芬楼新書分類総目」には、小説類を収録する。阿英の説明するように、「文学類では全部で翻訳小説を400種近くと創作を約120種を収録している」のだろう。もしかすると、上の「天字旧書」以外を加えたものかもしれない。教科書、東文書、英文書、日報雑誌などはいずれも新しい書物に分類されても不思議ではないからだ。

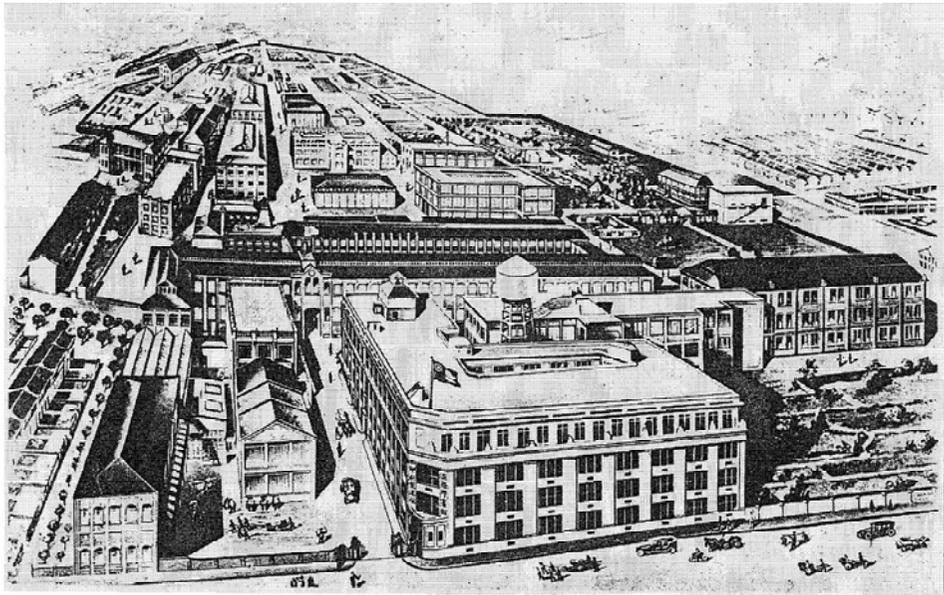
というわけで、阿英の示した『涵芬楼新書分類総目』は、依然として追跡中であると報告しておく。

4 商務印書館宝山路印刷所の配置図

商務印書館の規模拡大と繁栄ぶりを示した絵図に宝山路印刷所全景がある。

宝山路印刷所は1907年に落成した。創業後、わずかに10年しか経過していないのにこの壮挙である。日本金港堂との合併後であることにも注目しておこう。その後、広大な敷地に印刷工場そのほかを不断に増築する。

創立35周年を記念した莊俞「三十五年来之商務印書館」（1931）に掲載されたそのイラストは、よく引用されておなじみのものだ。手前のビルが堂々としており、いやがうえにも人の目を引く。そこだけ見ても全体の規模の大きさを感じさせる。



宝山路印刷所全景

見慣れた全景の絵図とはいえ、多くの建物が、それぞれ何に使われていたのか、はっきりしない。解説をした文章を見たこともない。ただただ大規模な商務印書館の印刷所である、という印象をふりまくだけだ。

汪家熔氏にご教示をお願いしたところ、うえに掲げた配置図を送ってくださった。1921年のものだという。

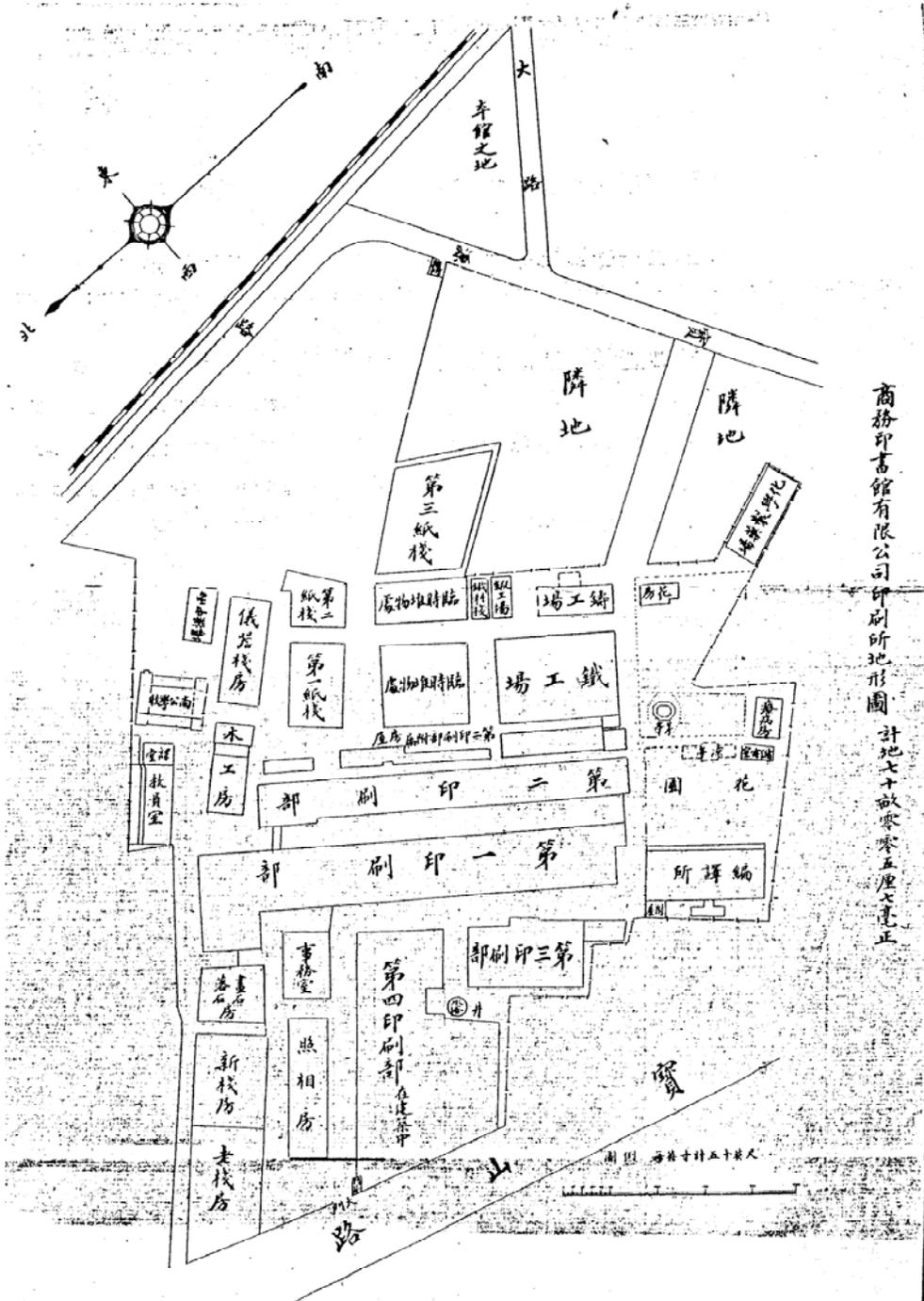
創立35周年の全景よりも10年をさかのぼる配置図ということになる。両者を比較してみると、ほぼ一致する。

目立つ手前の建物の奥に黒い屋根が2棟横たわっている。これが、宝山路印刷所の中心である。中心というのは、この地に最初に建設されたという意味である。すなわち、第一印刷部と第二印刷部だ。

商務印書館は、金港堂と合併をしたあと、業務拡大にそなえて宝山路に土地を買収し、巨大な印刷所を建設した。1棟では不足して第2棟を建設したというわけだ。

うえの配置図の左下に見える「新倉庫（新棧房）」と「旧倉庫（老棧房）」は、以前は、編訳所だった。

その編訳所は、1921年の時点で第一印刷部の右側、花園に新築して移転したとわかる。



商務印書館有限公司印刷所地形圖 計地七十畝零零五厘七毫正

宝山路印刷所の配置図

第三印刷部のとなりにそれよりも規模の大きな第四印刷部が「建築中」と表示されている。これこそが全景の手前中央部に位置する大きなビルである。印刷所であった。

左下の倉庫と第四印刷部にはさまれた写真部は、アメリカ人スタッフオードの指導で建設された。最初の場所に、そのまま存在している。

右手の編訳所の上方には、花園であって、その右手には蓄電部と医療部の建物がある。

第二印刷部の上方も配置図をたよりに見ると、鉄工場と隣接して臨時物置場だ。その左は第一紙倉庫、というぐあいに、まさに配置図のとおりが全景の絵図にもれなく描かれていることが判明する。

貴重な資料であることはいうまでもない。(2004.5.16清末小説研究会ウェブサイトにあらましを掲載した)

5 『最新国文教科書』

渡辺浩司氏より『最新国文教科書』関係の複写をもらった。教科書類は、資料として保存されることがすくないから、10冊そろいというのはめずらしい。重版数がバラバラだから、集めたものだとわかる。

それぞれの扉と奥付の記述を以下に示す。ただし、書名は省略する。図版を参照してほしい。なお、張人鳳「張元済直接参与編纂、校訂的商務印書館版教科書有幾種？」(『清末小説』第27号2004.12.1, 135頁)において、第1-7冊を原書で確認しているという。初版の月日が新暦に換算して示してある。これを[張:]と表示して該当部分に補う。

第1冊 10版

扉

日本前文部省図書審査官 小 谷 重

日本前高等師範学校教授 長尾楨太郎 校訂

福 建 長 楽 高 鳳 謙

浙 江 海 鹽 張 元 済

/

江 陽 湖 莊 俞

武進 蔣維喬 編纂 上海 / 商務印書館印行
蘇陽湖 楊瑜 統
奥付

光緒三十年歲次甲辰二月二十三日初版 [張:1904年3月29日(沢本注:1904年4月8日の間違い)]
光緒三十一年歲次乙巳四月十五日十版

第2冊 21版

扉

福建 長 樂 高鳳謙 校訂
浙江 海 鹽 張元濟
/

江武進 蔣維喬
蘇陽湖 莊 俞 編纂 上海 / 商務印書館印行
奥付

光緒三十年歲次甲辰二月第一版 [張:1904年3月28日]
光緒三十二年歲次丙午七月廿一版

第3冊 14版

扉 第2冊と同じ

奥付

光緒三十年歲次甲辰十二月第一版 [張:1905年1月6日]
光緒三十二年歲次丙午 五月十四版

第4冊 12版

扉 第2冊と同じ

奥付

光緒三十年歲次甲辰十二月初版 [張:1905年1月6日]
光緒三十二年歲次丙午五月十二版

第5冊 8版

扉 第2冊と同じ

奥付

光緒三十年歲次甲辰十二月第一版 [張:1905年8月10日(沢本注:張人鳳の記述とずれるのは、
後刷りだからか)]
光緒三十二年歲次丙午 六月八版

第6冊 6版

扉 第2冊と同じ

光緒三十年歲次甲辰二月二十三日初版
光緒三十一年歲次乙巳四月十五日十版

(圖文教科書第二册)
(每本定價洋一角五分)

翻印必究

編纂者	陽湖莊 武進蔣維喬
發行者	商務印書館
印刷所	商務印書館
發行所	商務印書館

本館為普及教育起見特于外埠分設支店並託各書坊代售如有僻遠之地無從購買本書者請即函示并將書價及郵費(照書價加一成)用郵政封入信申本館當即照數寄書空函定購恕不作理

最新
國文教科書

江蘇 武陽 湖莊 蔣維喬 編纂
上海 商務印書館 發行

日本前文部省圖書審查官 小谷重
日本前高等師範學校教授 長尾太郎
福建 樂高風 校訂
浙江 鹽張元濟 校訂

第1冊10版

光緒三十一年歲次甲辰二月第一版
光緒三十二年歲次丙午七月廿一版

(圖文教科書第二册)
(定價每本大洋二角)

存書經 翻印必究

編纂者	陽湖莊 武進蔣維喬
發行者	商務印書館
印刷所	商務印書館
總發行所	商務印書館

最新
國文教科書

江蘇 武陽 湖莊 蔣維喬 編纂
上海 商務印書館 發行

福建 樂高風 校訂
浙江 鹽張元濟 校訂

第2冊21版



第10冊初版

奥付

光緒三十一年歲次乙巳七月初版 [張:1905年8月20日]

光緒三十二年歲次丙午三月六版

第7冊 5版

扉 第2冊と同じ

奥付

光緒三十一年歲次乙巳十月初版 [張:1905年11月]

光緒三十二年歲次丙午四月五版

第8冊 5版

扉 第2冊と同じ

奥付

光緒三十一年歲次甲辰十二月第一版

光緒三十二年歲次丙午六月五版

第9冊 15版

扉 第2冊と同じ

奥付

第二十八課上方	彼爲兵	增汝字
第二十九課第一句	一年四季	增時字
第二十九課上方	一年四時	增時字
第三十二課上方	肩荷快槍	刪茂字
第三十五課第五句	肩荷長戈	
第三十五課第六句	下垂短刀	腰垂短刀
第三十五課上方		增槍字
第三十六課上方		刪間字
第三十七課上方		增短字
第三十八課第七句	美珠形圓	明珠形圓
第三十八課上方		增美字
第四十二課上方		增美字
第四十三課第一句	小屋兩間	刪短字
第四十三課第五句	兄弟五人	瓦屋兩間
第四十三課第六句	同一書房	兄弟二人
第四十三課第七句	夜去游散	同一學堂
第四十三課上方		夕去游散
第四十四課上方		增少字
第四十七課第七句	弟弟年七歲	妹妹年七歲
第四十七課上方		刪學字
第五十一課第四句	長五六寸	長一三寸
第五十二課上方		刪堂字
第五十三課上方		增共字
第五十五課上方		增汝字
第五十七課上方		增汝字

第1冊附録 初版、再版、三版、六版の字句異同表

光緒三十一年歲次甲辰十二月第一版
光緒三十二年歲次丙午六月十五版

第10冊 初版

扉

日本前文部省図書審査官 小谷重

日本前高等師範學校教授 長尾楨太郎

浙江山陰 蔡元培 校訂

福建長樂 高鳳謙

浙江海鹽 張元濟

/

江蘇武進 蔣維喬 編纂 上海商務印書館印行

奧付

光緒三十一年十月初版

		本書第一冊編就未印承 同志紛紛催促急行付印以應新年開學之用文字圖畫均有未愜之處至以為憾再版三版間有訂正茲當六版大加改良惟同一學堂雜用數版稍有窒礙謹將各版異同之處列為校勘表以備尋檢 (四五版與三版相同故不列表)		
第三課第三四字	初版	再版	三版	六版
第三課上方	手口	口舌	增手 舌字	
第六課第三句	田禾	田土	刪禾字	
第六課上方				
第七課第三句	分寸	寸分		
第七課第五句	手爪	指爪		
第七課上方		增指字		
第七課第六句	口舌	手足	手 脚 字 增	
第七課上方				
第八課上方		刪足字		
第九課第六句	林大	林茂	增茂字	
第九課上方				
第十一課上方		刪指字		
第二十課第三句	兄作文	姊作文		
第二十課第四句	弟習字	妹習字		
第二十一課第六句	田中禾	村中犬		
第二十一課第七句	紡紗人	紡紗女		
第二十一課第八句	采桑女	采桑人		
第二十二課第七句	父坐左	父坐右		
第二十二課第八句	客坐右	客坐左		
第二十八課第七句	汝為兵	彼為兵	增 汝 字	
第二十八課上方				

以上、10冊にわたって扉と奥付の記述をかけた。わずらわしい、なんの意味があるのか、と読者はいぶかれることだろう。だが、この表示には、興味深い事実が反映されているのだ。

扉の表示には、いくつかの形があるが、基本的には大きく分けてふたつになる。日本人の小谷重と長尾楨太郎の名前を掲げるものと、そうではないものだ。中国人の名前には出入りがあるが、これが問題なのではない。

くりかえす。教科書の扉に日本人名を出すかださないか。これが重要なのだ。

日本人名を掲げるものの発行年月は、第1冊の10版、すなわち光緒三十一年四月十五日(1905.5.18)である。もうひとつある。第10冊の光緒三十一年十月発行だからこれも新暦になおせば1905年となる。

日本人名を削除するのは、第2冊から第9冊まで、それぞれ重版数は異なるが、発行年はすべて光緒三十二年、すなわち1906年なのだ。分かれ目は、1906年であることがはっきりしている。

1906年から学部の「審定」を経る必要が生じた。そのために日本人名をはずすと理解できよう。第1冊の1906年版（「学部第一次審定」とかかげる）には日本人名を掲載していない事実を樽本照雄が指摘している（『初期商務印書館研究(増補版)』2004.5.1. 249頁）。そういうことだ。

第1冊10版には、もうひとつ興味深い文書がついている。初版、再版、三版、六版の字句異同表である。これを見ると、教科書本文に絶え間なく手を加えていることがわかる。参考までに、異同表を掲げておく。 

【注】

- 1) 参考文献：汪家熔「涵芬楼和東方図書館」『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5。355-357頁。呂長君「商務印書館の涵芬楼」『出版史料』2004年第3期(新総第11期)2004.9.25。102-105頁
- 2) ものの本によると『涵芬楼旧書目録』5巻、同続編5巻、同再続編5巻、同三続編5巻があるという。このことを指しているのか。
- 3) 郭延礼『中国近代文学発展史』第1巻 済南・山東教育出版社1990.3。4頁。施蛰存「導言」『中国近代文学大系』第11集第26巻翻訳文学集1(施蛰存主編)上海書店1990.10。15-16頁

(さわもと いくま)